

(図上部の口上)

是は此たび世に称らし

き親のかたきをうつ

たる次第

所は名にし

大坂の天

王寺の橋づめにて 敵平岡

丈五郎それにかたんのわるものをかよ

はき女の五人切り首尾よく本望とげたるは

てん満の町に名も高き坂間が水仕のおたけとて

貧苦にせまる曾根ざきの父次郎右衛門へ

我食を日毎におくる孝行は洗ひながしの仏ぼさつ

実に雪山の kannan よりうき事つもる

親と子がなみだに袖もぬれぎぬのかねの

せつばの身売さへ主人がなさけに助りし

も水のあはれやおこりやみ深手を

老がまつこの槍じゆつあつばれ

忠義の彦助がみがく

こころの竹鎗にて

ほまれを鶏のなく音

につれ丁度夜

明のあけぼの

に後光も

さすが天

道の恵を

うけし大日如来

此二幕を中入に世界を

結ぶ冬角力その顔触も珍らしき

放駒と濡髪がけふ初めての取組にこそつて

車の立引も当つてくだける茶碗と茶碗

丸く納て兄弟の姉が異見も甘酒や

情はふかき淀川にへだてぬ中も

川向ふ八幡山ざき両

床が是狂言の

山の段妹背山

めく仕組

ゆへ扱大さておほ

切の一幕

は彼おだ巻かのまき

の蜘蛛くもの糸いと紅葉色みぢいろます錦にしき

絵えに頼光公よりみつこうや四天王えうくわい妖怪えうかいの出る

浄じやうるり迄までのこらず御覧ごらんに入いれば

相あかはらず永当えいたうく御見物ごけんぶつに御来駕ごらいがあるやう

偏ひとへにねがふ守田座しんきやうげんの新へ狂言きやうげんの評判へようばんく